

オースティンの『エマ』について

宮 西 光 雄

一般に、ジェーン・オースティンの代表的な傑作は『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*)とみなされている。しかし構想のまとまり、人物の配合、筆致の円熟という点からみると、『エマ』(*Emma*)の方が完璧にちかいたといえるかとおもう。

オースティンの六篇の小説の出版年は、『知性と多感』(*Sense and Sensibility*)が一八一一年、『自負と偏見』が一八一三年、『マンズフィールド・パーク』(*Mansfield Park*)が一八一四年、『エマ』が一八一五年、『ノーサングー・アベイ』(*Northanger Abbey*)と『説得』(*Persuasion*)との合本が、オースティンの死後の一八一八年となっている。そのうち『自負と偏見』と、『知性と多感』と、『ノーサングー・アベイ』の三篇は、オースティンが二十一歳から二十三歳までに創作したもので、習作時代をへたのちの第一期作品として、まとめて考えられてきた。一七九六年十月から翌年の八月までに書きおわっていた『第一印象』(*First Impressions*)は、その原稿をあずかっていた出版者キャドルからとりもどされ、それに修正をくわえたものが『自負と偏見』と改題されたことは周知のことである。ちなみに『知性と多感』は一七九七年に書きおえて、一八〇三年に出版屋に売られたものであったが、出版はながらく保留されていた。『ノーサングー・アベイ』は一七九七年に書きはじめられたことはたしかであるが、未完成のままになっていたようである。ところで、『エマ』はオースティンが四十歳

のころに創作したものであって、三十九歳のときの『マンズフィールド・パーク』と、四十二歳のときの『説得』とともに、オースティンの第二期作品とみなされている。第一期作品と第二期作品とのあいだには、二十年にかい年月のへだたりがあった。そうした年齢のちがいが、オースティンの作品にかなり影響したとみえることは当然であろう。もっとも、『自負と偏見』の出版は上記のように一八二三年であって、第二期作品の構想があらたに意識されていた年代である。しかも、死期をはやめた不健康な身体であったにもかかわらず、せっかく書きあげた『説得』の最後の一章を削除して、そのかわりに、あらたに二章を書きくわえた事実が証明するように、芸術意識に徹して、思いきった修正をもあえてしたオースティンが、『第一印象』の旧稿に、かさねがさね厳しい加筆をこころみたことは十分に考えられることである。それにしてもなお、『自負と偏見』はそのもち味と本質的な機構において、二十一歳の創作『第一印象』の面目を一新したものではないとみられる。『自負と偏見』にはブリリアントな若さがみなぎっている。臆することのない鮮明さがあり、直線的なおし強さがある。それにくらべると、『エマ』には落ちつきたいぶし銀の確かさがあり、しっとりとした深みや、曲線的な調和があるように感じられる。どちらも、健康な明るい空気につつまれているが、『自負と偏見』には屈託のない若やいだ笑声がただよい、『エマ』にはおだやかな微笑がつきまといっている。

※

さて『エマ』は、オースティンの他の作品と同じように、南英の田舎村に場面を設定している。サレイ州のハイベリという村で、ロンドンから南十六マイルのところにある。村といっても町ほどの大きさで、町並みになっている地域には、郵便局や、旅館や、呉服雑貨の店もあり、近くには牧師館つきの教会や、私立の女学校もある。近郊にはウッドハウス家のハートフィールド、ウェストン家のランダルズ、ナイトリ家のドンウエル・アベ

イというような広大な屋敷が、たがいに往き来される距離にかまえられている。これらをもふくめて、ハイペリと総称することもある。そうした場面で、数家族の老若男女の社交生活がくりひろげられるのである。ほとんどすべてが中流の上層であつた紳士階級であるが、そのなかでも、家柄とか、素性とか、貧富のけじめがあつて、そういうことにたいする意識が微妙に反映する雰囲気の中で適齢期の女性たちをめぐって、結婚目標のラヴ・メイキングということが社交の中心課題になっている。そして、その中心課題をとおしてからみあう人間心理の様相に、アイロニカルな人間的事実をつきとめるいきさつが、この作品の主題になっている。『エマ』に喜劇の笑いがつきまとうゆえんである。その笑いはゆとりのある健康な笑いである。善意にみちた諷刺とヒューマールのしみじみと透きとおる微笑である。まず、作中の主要な人物を一括してみることにする。

ハートフィールド邸の当主、ミスタ・ウッドハウスと、その娘エマ。エマは間もなく二十一歳になる。エマの姉イザベラはロンドン在住のジョン・ナイトリの妻、ヘンリを頭に五人の子もちである。ウッドハウス家はハイペリきつての名門で、ゆたかな資産と広大な邸宅をきりまわすエマは、格式と見識によつて、いわばハイペリに君臨しているような才媛である。ドンウエル・アベイ邸の当主、ミスタ・ジョージ・ナイトリ。上記のジョン・ナイトリの弟で、三十七歳の独身者。ウッドハウス家を上まわる財産や屋敷があつて、つとにウッドハウス家と親交をむすび、とくにエマとはたがいに言いたいことを言いあえる間柄であつて、かの女の言動を見まもり、かの女に忠告の苦言をいつてみることもある。

ランダルズ邸の当主、ミスタ・ウェストンと、その妻アンナ（またはアンとよぶ）。アンナはもとエマ・ウッドハウスの家庭教師ミス・テイラーであつて、この夫妻の縁組はエマの斡旋によるものであるから、ウェストン家とウッドハウス家とは格別に昵懇であつて、ウェストン夫妻のどちらかがウッドハウスを訪れない日は滅多にない。巻末で女の子が生まれ、母の名をとつてアンナとよばれた。

フランク・チャーチル。ミスタ・ウェストンの先妻の子で、二十三歳。その実母は北英ヨーク州のエンスクーム邸のミスタ・チャーチルの妹であつたので、チャーチル家の養子にもらわれ、エンスクーム邸に住んでいる。養母チャーチル夫人に可愛がられている。

ジェーン・フェアファックス。エマのおさな友達で、同年の二十一歳。ジェーン・ベイツがフェアファックス中尉と結婚して生まれた娘であるが、父は海外で戦死し、母もつづいて病死したために孤児になっていた。ところが、父の上官であつたキャンベル大佐が、戦地でかの女の父に助けられた恩がえしに、かの女をロンドンの自邸にひきとつて、わが子ミス・キャンベルと同様に養育した。

ミス・ベイツ。ハイベリで、母ベイツ夫人と貧乏ぐらしをしている。ジェーン・フェアファックスの叔母と祖母にあたる。祖母はハイベリの教区牧師の未亡人である。

ミスタ・エルトンとミセス・エルトン。ハイベリの若い牧師とその妻で、牧師館に住んでいる。エルトン夫人はブリストルの商人の娘オーガスタ・ホーキンスであつて、作品の半ばごろでエルトンと結婚する。

ハリエット・スミス。ミス・ゴッダードが校長である私立女学校に寄宿している私生児で、十七歳。仕送りは潤沢だが、親許は不明。

ロバート・マーティン。アベイ・ミル・ファームの自作農で、二十四歳。ミスタ・ジョージ・ナイトリの使用人。

このような人物がとりあわされるシチュエーションにおいて、その中軸となる人物は、いうまでもなくエマ・ウッドハウスである。そして『エマ』の書きだしはいきなりかの女についての記述であつて、『自負と偏見』の書きだしとともに、名句として知られている。

エマ・ウッドハウスは目うるわしく、才長けて、富有であり、住み心地のいい家があつて、気だてはほがらかだから、

生活の最上のしあわせをいくつか一身にかねそなえているようであった。それで、悩みごとお腹のたつこともなくこの世に
くらしてきて、やがて二十一歳の年ごろになっていた。

これによって、まず、エマ・ウッドハウスが才色兼備で、しかも幸福な身分であることが強く印象づけられる。
ところで、母はかの女の幼いときに亡くなったので、ミス・テイラーの訓育を十六年間うけて成人したのであ
る。エマは何事につけても、かの女の信頼するこの家庭教師の判断を尊重したのであるが、けっきょくは自主的
な判断を固執するならわしになっていた。つまりミス・テイラーがエマの言いなりにさせておく結果になったの
である。エマの父は人ざわりがよくて、哀れっぽく話しかける傾向があつて、とくに婦人には親切な、すこぶる
好人物型であつた。ところが無くて七癖で、病氣にかかりやすいという妄想におびえることを、かえって楽し
みにしているような病身趣味 (valetudinarianism) があつて、暑さ寒さや、雨降りやすきま風や、適量の運動や食
べものなどについて、異常に神経をつかうのである。自分のことだけでなく、ほかの人びとのためにも、同様に
神経をつかつた。パーティではなによりもまず、一座の人びとのために「すきま風」を気にするし、誰にかざら
ず、病氣だとわかると、かれが命の綱とたのむベリ医師に診察させるように話しかける。雨にあつて濡れて来た
ミス・ハリエット・スマスには、かの女の健康と顔の色つやのために、早急なストッキングのはきかえに気をく
ばり、年老いたベイツ夫人には、自分の好みのグルエル(オートミールルのかゆ)を常用するようにすすめる。そしてこうした習
癖が昂じて、エゴセントリックなものの考えかたをするようになり、ついには、平常とはちがった事情が身邊に
おこることをきらい、姉娘のイザベラがジョン・ナイトリと結婚して、家をはなれてロンドンに住んでいること
を、いまだに可愛想に思っている。家庭教師のミス・テイラーが、結婚のためにかれのハートフィールド邸を出

ていったことも、気の毒でたまらないのである。今はすでにミセス・ウェストンであるのに、その顔を見るたびに‘poor Miss Taylor’とよびかけるのである。このような父親の世話にはずいぶん気骨が折れるわけであるが、万事テキパキとやっつのける俊敏なエマは、父親に至れり尽せりの世話をして、父親から絶大な信頼をうけていた。しかも、家事万端に采配をふるうことができる立場にあるエマは、この現在の境遇を、結婚によってあてがわれる妻の座ととりかえたい気持は毛頭なかった。だから、結婚はしないことに決めていたのである。ところで、このように気丈な才媛にも、あぶなっかしい欠陥があった。さきに引用したエマに関する叙述から一頁たらずのところに、つぎのような伏線が明記されている。

エマの境遇に真に実在する災禍は、かなり我意を通しすぎる才幹と、自分自身をやや買いかぶる性向とであった。この禍根が、かの女の多くの楽しみごとを不純にしそうな障害であった。しかしその危険は、さしあたっては気づかれていなかった。なので、かの女にとって、その禍根が災難になると思われることは決してなかった。

この我意を通しすぎる才幹と、自分を買いかぶる性向とによって、エマはほとんど無意識に、才走った言動や臆測をエゴセントリックに展開し、そしてその網目のなかに他の人びとをかきよせることになる。それだけにエマは、気ざっぱい不愉快な局面をさらけだし、失敗をくりかえして、そしてやつのことで、かの女みずからの人間性の底面に突きあたるのである。そこには、かの女のために設けられた陥穽があったのであり、同時にまた、かの女自身が人間的に救われる契機もあった。そしてそのような事態の推移に、作者オースティンの、人間愛に徹した観照の微笑がまつわりつくのである。

※

ミス・ティラーの幸福な結婚は、実はエマの斡旋によるものであった。エマが未婚の身でありながら、結婚の媒介に自信をもったことは自然のなりゆきであった。しかしその自信に、エマが失敗をかさねる第一の原因があった。さてエマは、ミス・ティラーと起居を共にしていたころには、二六時中かの女と親しく話しあって、かずかずの楽しい思い出があった。かの女がウェストン夫人になってからも、ほとんど毎日欠かさず訪問してくれるので、かの女との親交はあいかわらず続けられていたわけであるが、エマはそれでも、しょっちゅう相手にできる女性の不在が、さびしく意識されるのであった。エマはそのさびしさを紛らすために、ゴッダード先生の学校の寄宿生ハリエット・スミス、ハートフィールド邸へ来させることにした。初対面ですっかり気に入る、エマが指導役になって親交をむすぶことになった。ハリエットの容貌はつぎのように描写されている。

かの女はとっても可愛い美少女であった。そしてその美しさはたまたま、エマが格別に嘆賞する類いのものであった。背が低く、ふっくらして、色白で、頬の紅みはほんのり、目は青く、髪毛はうす色で、目鼻たちは整い、愛くるしい顔つきであった。そして背がふけるまでに、エマは、かの女の起居ふるまいが、かの女の容姿と同じほど気に入って、この見知りあいを継続しようとかく決心した。

この十七歳のハリエットが、親許の知れない私生児であることはわかっていたが、エマはそれゆえにこそかえって、この少女をレディにしたててやろうと、たいへんな熱のいれかたである。そしてゆくゆくは、自分と交際をつづけられる身分の縁組を、ハリエットのために企てることになった。ハリエットが学友エリザベスの家で休暇をすごしたのが因縁で、学友の兄ロバート・マーティンから、ハリエットに求婚の手紙がきたのが、そうした企

てのきつかけであつた。対等には付きあえない低い身分のロバートでは、エマが問題にするわけがない。エマは遠まわしに指図して、ハリエットにことわりの返事を書かせた。そしてまずハリエットにふさわしい男性として、エマは若い牧師のエルトンに白羽の矢をたてた。そしてそのための胆いりに熱中することになった。エルトンを青年の「模範」としてもさしつかえない、とまでエマは考えていたのである。しかしエマとはながい付き合いのミスタ・ナイトリは、エマのこの下心を察知して、それとなくエマにたびたび警告したのであつた。エルトンは虚栄心のつよい、実利的な、高のぞみの男だと見ぬいていたからである。エルトンとハリエットの間をとりもつことに没頭しているエマが、実はエルトンのねらいであることを書きわめていたのだ。しかしエマはナイトリの警告に耳をかさなかつた。ところが、ウェストンのランダルズ邸で催されたクリスマス・イーヴのパーティでは、風邪がこじれて潰瘍性咽喉炎に苦しむハリエットが別室へ運ばれたのに、エルトンはさして気づかう風もなく、むしろ伝染をおそれて近づかなかつた。そしてともすればエマのそばに来て陽気に談笑した。かれがエマに愛情をよせていることは、たまたま居あわせたジョン・ナイトリにさえわかつていたが、エマはそのことを一笑に付した。しかるに、はたして帰途に、偶然のように乗りあわせた二人だけの馬車のなかで、エルトンはエマに熱烈な求婚をしたのである。かれが求婚すべき相手はハリエットであつたはずだとエマがなじると、かれは最初からエマを思っていたことを誓い、しかもエマ自身にもその気があつて、エンカレッジしたではないかと詰めた。——エマが描いたハリエットの肖像画に額ぶちをつけるために、エルトンがロンドンへ急行したことがあつたが、それはかれがハリエットを愛している証拠だとエマは解していたけれども、実はエマにとり入るためのご機嫌とりにすぎなかつた。求愛の英語は courtship であつて、その単語を二分すると、「宮殿」(court) と「船」(ship) になる。そこでエルトンは、エマとハリエットが文字謎 (conundrum) 集を作製している机に、

紙片に書いた自作のものをおいて行ったことがある。その文字謎の前半は国王の「宮殿」をあらわし、後半は海上の王者である「船」をあらわし、そしてその二つを合体すると、陸や海の君主らはたち消えて、美女がただひとり君臨する、という意味の八行詩になっていた。しかもつぎの二行が書きそえてあった。

あなたの即妙な才知はすぐにこの言葉をあててでしょう、

そのやさ眼まなこにこの言葉をみとめる輝まぶきが現れますように！

前書きは「ミス・——へ」となっているから、ハリエットは真剣に考えてみたけれども解きかねた。エマはじめの八行をすぐに求愛(courtship)と言いあてたが、最後の二行の「即妙な才知」というのが気にかかりながらも、「やさ眼まなこ」はハリエットの青い目だと速断し、これもハリエットにたいするエルトンの愛情の表明だとみてハリエットをはげましたのである。しかしエルトンはエマの才知をほめ、エマのうす茶色の「ハンバミ色の目」をたたえたのであった。——エマがエルトンの思いあがりに憤慨し、かれの求婚をきっぱり拒絶すると、かれは粗野な雑言をのこして、冷やかに別れて行った。エルトンがねらっていたのは、エマの財産と社会的地位にほかならなかった。かれは上層の社交界に出入りしていたので、応待ぶりは温和であったけれども、真の上品さがないと欠けていたことを、エマは今さらのように思いだした。それにしてもハリエットをどう慰めてよいか、エマは途方に暮れた。エマ自身のさしがねどおりに行動し、エマ自身にはげまされて希望をいだいたハリエットである。買物をするときでも、無地の服にするか柄物にするか、リボンの色を青にするか黄色にするか、というこ

とまで一々エマの指図に頼りきっていたハリエットであった。

ハリエットは決して頭はよくなかったが、可愛げのある、すなおな、恩に感ずる気だてがあつて、自惚れはみじんもなく、誰でもかの女があがめる人によつて、導いてもらいたいと思つていただけであつた。

このようなハリエットが、ずっと後にわかつたことであるが、エマの家の机上にエルトンがすてておいた鉛のシンもない古鉛筆の切れ端を、絆創膏につつんで後生大事にしまつていたことは、あまりにもいじらしい。エマが窮地にたつて煩悶するのは当然であつた。しかもエルトンはさつさとバースへ行つて、そこに來ていたオーガスタ・ホーキンスと結婚してしまつた。そしてハイベリの牧師館に住みついたエルトン夫妻は、エマにたいしては敵意をふくみ、ハリエットにたいしては侮辱の目顔をむけて寄りつかない。

オーガスタは、ブリストルの商人の妹娘であつたが、一万ポンドの財産つきであることがエルトンにとつて魅力であつたらしい。初対面のエマの印象では、虚栄心のつよい女であつて、度はずれた自己満足によつて、自分を偉いと思ひこみ、異彩をはなつてうわてにすることはかりを心がけていた。しかも作法の心得がなく、とかく出しやばつて慣れなれしくする。かの女の見解はすべて、たつた一組の人びとと、たつた一つの生活様式からひきだされたものであつて、実は愚かと思はれるほどに無知であつた。かの女の社交はむしろエルトンにはマイナスになるとしか思われなかつた。姉のセライナの婚家は、ブリストルに近いメイブル・グローヴという広い屋敷で、二台の馬車をもつて裕福なぐらしをしていた。オーガスタは事ごとにそれを鼻にかけ、二言めにはそのくらし向きをひき合ひにだした。ミス・ホーキンスであつたときの社交界の地位は大したもので、それにまさるものは、ただミセス・エルトンとしての今の身分だけである。夫をさして‘my dear husband’とは言わずに、わ

ざわざイタリア語で、*'my caro sposo'* と言うか、ただ *'Mr. E.'* と言うのが口癖であった。そしてミスタ・ナイトリには「ミスタ」をつけずに、ただ「ナイトリ」と呼びかけた。エマが二度目にあったとき、「自惚れのつよい、出しゃばりの、慣れなれしい、無知な、育ちのわるい女」であることが確認された。美しさも教養もほんのちよっぴりである。エマにとっては「鼻もちのならぬ女！」(*Insufferable woman*)であった。エマはこうした感想をハリエットに話して、かの女の気持のきりかえをはかった。しかしさすがのエマも、かの女に言いふくめて恋心をなくさせることは、かの女に言いふくめて恋心をもたせたときのように容易ではなかった。「この最初のそして最悪の過失はエマの責任であった」のである。

※

ハイベリでは、エルトンの結婚の情報がつたわる以前に、フランク・チャールと、ジェーン・フェアファックスとが、それぞれわざわざにのぼっていた。フランクの方は、かれが近く実父のウェストンを久方ぶりに訪れることを父にしらせてきたからである。ジェーンの方は、叔母のミス・ベイツあての手紙に、これも近く帰ってくることを書いてあったからである。後妻であるウェストン夫人は、まだフランクとは面識がなかったのであるが、かれの人柄や動静は夫から聞いて知っていたので、かれの訪問を待ちわびながら、かれからのしらせをさっそくエマに話したのである。エマとフランクとだったら、人品といい、家柄といい、似合いの縁組ではないかと予感したからである。エマはハリエットと対談していたとき、エマの結婚拒否説について、ハリエットがいぶかしく質問すると、エマ自身の結婚観がつぎのように述べられている。

あたしは、女が結婚したい動機なんか全然もちあわせていない。仮りにあたしが恋をするとしたら、もちろん事情はちが

うでしょう。しかもあたしは、今まで恋をしたことはないのよ。恋なんて、あたしの柄でもないし、あたしの性分にも合いません。これからだって恋をすることはないでしょう。今のあたしのような境遇を変えたら、それこそあたしはおバカさんだわ。財産もいらぬ、職業もいらぬ、社会的な地位だっていらぬ。……あたしは、みすばらしいオールド・ミスなんかにはなりませんよ。貧乏だからこそ、独身ということが、上流の人たちに軽蔑されるんだわ！ 収入のとぼしい独身女なら、バカげた、不愉快な、オールド・ミスとなるにきまっている。女子供のなぶりものです。でも、財産がたっぷりある独身女なら、いつまでも体面を保っていられるし、誰にもおとらず分別があって、人好きのするものよ。

財産も、職業も、社会的な地位もいらぬ、と断言してはばからなかったエマであるけれども、恋愛だけには憧れをもっていたことがパラドクシカルに察知されるであろう。エマのような「よわむしではない性格」(no feeble character)の女性でも、恋心が芽ばえさえすれば、結婚にふみきる覚悟は十分にあった。エマもまた、ウエストン夫妻におとらず、フランクの到着を心たのしく待ちうけていた。

エマが「収入のとぼしい」オールド・ミスといったのは、実はハリエットが対談中に、結婚をしないで年をとると、ミス・ベイツのようになりはせぬか、と口ばしを入れたからであった。まさにミス・ベイツはハイペリの町なかで、母のベイツ夫人と貧乏ぐらしをしていたのである。しかしミス・ベイツは心そこからの好人物であつて、とるに足らぬことを長々としゃべる癖はあるが、それもかえって愛嬌になった。まっ正直で、気さくで、人さまの好意や恩義には感謝せずにはいられない、単純な老嬢である。ずっと後に、フランクはミス・ベイツの印象をつぎのように述べている。「とっても面白い、とびきり面白いひとだ。ぼくはミス・ベイツのおしゃべりを聞くのが大好きだ。……かの女は笑ってやってもいい、いや笑ってやらずにはおれない女だ、だがしかし、バカにしてやりたい気にはなれそうもない女だ。」ともかくこのミス・ベイツのなによりの自慢のたねは、かの女の

姪のジェーン・フェアファックスであった。ジェーンのこととなると、ハイベリ中にふれまわるのである。ジェーンがハイベリに帰るうわさがたつ前のことであるが、ハリエットがエマに、ミス・ベイツの姪とお付きあいがあるかとたずねると、エマはこう言った。

ええありますとも。あのひとがハイベリに来るたびに、あたしたちはイヤでもしょっちゅう付きあわされるのよ。ついでに言うけれど、あんな風にしたのでは、姪っていうものにイヤ気がさしてよ。とにかく、あたしがナイトリ家のみんな（姉妹・ナイトリの子で、ある姪や甥たち）のことだって、それで人さまをうんざりさせるような場合が、ジェーン・フェアファックスのことでミス・ベイツがそうしている場合の、半分だってあってたまるものですか。ジェーン・フェアファックスという名前までが、もうあきあきされているのよ。あのひとから来た手紙はどれもこれも、四十辺は読みかえされるの。お友だちのみなさんへの挨拶は、くりかえしぐるぐるまわって伝えられるのよ。そして叔母さんに胸衣の型紙を送ってよこすか、お祖母さんに靴下どめを編んであげただけでも、ひと月のあいだ、その話ばかり聞かされるのです。あたしは、ジェーン・フェアファックスが大いに仕あわせであってほしいと思うのだけれど、あたしには、命がぢまるほどうんざりするひとなの。

これは、ジェーンにたいするミス・ベイツののぼせかたを明示する一例であり、また同時に、ジェーンにたいするエマの対抗意識をも暗示するものである。エマもジェーンも、ともに美人であることは十目の見るところである。ただしジェーンが、エマとはいちじるしく対照的な美人型であるという事実、エマのライヴァル意識をかきたてる素因があったと思われる。ウェストン夫人はミスタ・ナイトリに向って、まずエマの明眸をたたえながら、エマの容姿についてつぎのように言ったことがある。

とってもすばらしい目なんですのよ！——あのほんとうのハシバミ色の目——つややかに輝く目なんですのよ！整った目鼻だち、色つやのいい、隠しだてのない顔つきなんですのよ！健康にみちみちた紅らみと、格好のいい背たけと大きさ、それにどっしりとまっ直ぐな姿なんですのよ。頬の紅らみだけでなくて、態度にだって、頭の部分にだって、まなざしにだって、健康がみなぎっているのですよ。子供は「健康の権化」だって、ときどき聞かされることがありますわね。今のあのひとは成熟した健康の権化だ、とあたしはいつも思っているのです。惚れ惚れする美人ですわね。ナイトリさん、そうじゃありません？

健康そのものである、血色のいい、エマのすらりとした格幅のいい容姿の焦点に、開放的な顔だちから、俊敏な明眸が輝いている。いかにも知的な、率直な、現代型の美人である。ところでジェーンの方は、つぎのように描写されている。

……ジェーン・フェアファックスはとっても上品であり、とびぬけて上品であった。そしてエマ自身も、上品ということは何よりも尊重していたのである。ジェーンの背だけは相当にあって、ほとんどの人びとが背高だと思う、ちようどそれくらいの高さであり、そして誰もがひどく高いとは思えないほどの高さであった。姿はとりわけ優美であって、大きさは肥満と痩せぎすとの中間の、すこぶる似つかわしい中肉であった。もっとも、やや不健康そうな外観のために、この二つの型のうち、好ましくからぬ方の瘦型であるようにみえることはあった。エマは、こうしたことをすべて感じないわけにいかなかった。それから、ジェーンの顔——目鼻だち——そのすべてを総合したものには、エマが思いだせないほどの多くの美しさがあった。整ってはいないけれども、すこく人好きのする美しさであった。かの女の目は濃い灰色であって、それに黒つぽいまつ毛と眉毛がつきそっているの、つい称讃せざるを得ないものだった。しかし血色が足りないというわけで、エマがいつもケチをつけていた肌は、透きとおってキメがこまかいので、実際には、頬の紅らみがもっとあった方がいいとはいささ

かと思えなかった。上品さが優勢な特性となっている型の美しさであった。そしてそういう型としては、エマが節操にしたい、みずからのすべての道義にもとづいて、その美しさを嘆賞しなければならぬものである。その上品さは、容姿についてであろうと、精神についてであろうと、ハイベリにおいては、エマがお目にかかることはほとんどないものであった。そこでは、卑俗でないというだけで、非凡ともなり、長所ともなるのであった。

すらりとした上品なジェーンの容姿は、エマのそれと比べ称すべきものであった。しかしその他の点では、すべてエマとは対照的である。第一、エマの健康な血色にくらべて、ジェーンの顔色は不健康な印象をあたえた。「ミス・フェアファックスは生まれつき青白いタチなので、ほとんどいつも不健康な様子になっている、——実にあわれなほど血色がわるい」とフランクも言ったほどである。それにもかかわらずジェーンは、巻末においてわかることであるが、フランクにとっては「完全な天使」であった。ジェーンの容貌の魅力は、肌のキメと肌色と、そして黒みがかかったまつ毛と髪毛であった。「あんなすばらしい肌を見たことはありませんか？——あんななめらかさ！ あんなキメのこまかさ！ しかも実際は色白でない。とても珍らしい顔色です、まつ毛も眉毛も黒っぽくて、——ずばぬけて特色のある顔色です！——それほどに特異に、そんな顔をしているレディ、——美しくなるのにこころ合いのほのかな紅らみ」とフランクは嘆賞している。フランクだけでなく、ナイトリにとっても、ジェーンは「すこぶるチャーミングな若い女」であった。エルトン夫人までが、ジェーンを「大好き」になって、手なずけるようにして可愛がっていた。ミス・ベイツのジェーンにたいする身びいきは論外として、ジェーンの鑑賞眼と自負心が、エルトン夫人との親交に堪えていられる点で、ジェーンはエマにとってはまったくの「なぞ」であった。ロンドンのキャンベル大佐の邸宅で「訓育と教養」(discipline and culture)を身につけたジェーンが、素性も育ちも低級なエルトン夫人とウマが合うわけがなかったからである。ジェーンに寄

せるナイトリの好意的な言動にも、エマは異議があつた。うちとけない無口なジェーンに、エマの開放的な性格が反撥したのである。「ジェーンはさらに、いちばんわるいことだが、ひどく冷たくて、ひどく用心ぶかつた！かの女の本心はつかめなかつたのだ。かの女は礼儀の衣をひつかぶって、なにことも敢えてする決意はなささうだった。イヤ氣がさすほどに、うさんくさくなるほどに、隠しだてがあつた」と作者も記述している。ナイトリも、「夫が妻にあつてほしいと思うような腹臆のない氣性は、ジェーンにはなかつた」ことをみとめているのであるけれども、それでもジェーンにはとかく同情しがちであつた。ジェーンにたいするフランクの讚美については、エマは巻末にいたつてはじめて聞かされたのであつて、当初はむしろ、ジェーンにはよそよそしいフランクだと見ていたのである。ともかく、エマとジェーンとのあいだに、ナイトリと、エルトン夫人と、フランクの三人を介在せしめることによって、そしてときどきハリエット・スミスを混入せしめることによって、この小説のプロットが盛りあがってくるのである。

※

さて、フランク・チャーチルの帰郷は早くから喧伝されていたのであるが、養母チャーチル夫人がフランクを可愛がつて手ばなしたがらず、しかも養母はとかく病身であるため、フランクも意を決しかね、かれの帰郷はながいあいだのびのびになっていた。そういう趣旨のフランクの手紙はエマも読み、ナイトリも読んでいた。ところでフランクの人柄について、エマは「氣だてがやさしい」と感じ、ナイトリは「意志薄弱」とみきわめた。ウエストン夫妻はもちろんのこと、フランクの帰郷を待望している人びとの氣持を、フランクがどう受けとっているかが問題であつた。ぜひ来なければならぬと思つてゐるならば、なにはさておき来る甲斐性はある年ごろだから、フランクは妙に不自然な男だとナイトリは考えた。エマは、尊大で贅沢でわがままな人たちに育てられたフ

ランクもまた、尊大で贅沢でわがままであるのは当然であると反駁した。そしてランクは、「すなおなおとなしい気質」であると言ひそえた。すると、ナイトリはこう言うのである。「かれはすこぶる氣だてがやさしく、そしてすこぶる感じのいいひとかもしれない。だが人さまの氣持にたいする、イギリス人のこまかな心づかいをもっているはずがない。かれには、ほんとうにやさしい氣だてなんかなにもないのだ。」そしてこの言葉の前後に、「かれの手紙にはイヤ氣がさす」と言い、「ぺちゃくちしゃべる氣どりやだ」と断言してはばからなかった。そこでエマは、「あなたはなんでもみな悪くとりましますね。あたしたち二人はどちらも偏見をもっているのです。かれにたいして、あなたは悪意をもち、あたしは好意をもっているのです。あたしたちの意見が一致するチャンスは、かれが当地に来るまではありませんよ」としめくくった。ランクがこの二人の評言のどっちに該当するかはさておき、エマとナイトリは、主張すべきことはどこまでも主張しあう間柄であった。

ランクがやっと到着してウェストンといっしょにハートフィールド邸を訪れたときのランクは、つぎのよう描寫されている。

かくも長いあいだうわさされ、かくも興味をもたれていたランク・チャールズが、現実にエマの前にいた——かれはかの女に紹介され、そしてかの女は、かれをほめすぎることは言っていなかったと思った。かれはすばらしく美貌の青年であった。背だけといい。態度といい、応対ぶりといい、すべて非のうちどころはなかった。かれの顔だちには、かれの実父の氣力と快活さがたっぷりそなわっていた。鋭敏で分別のある顔つきであった。すぐさま、かの女はかれが好きになれそうだと思った。しかも、しつけのいいゆつたりした態度と、進んで話しかけたい氣配があったので、かれはかの女と付きあいたいつもりで来たのであり、そして二人はきつと間もなく付きあうことになる、とかの女は確信した。

それでも、エマは慎重にかまえていた。というのは、生きぬ仲のウェストン夫人とフランクが連れだっているところを見たいと思つたからである。つまり、ウェストン夫人にたいするフランクのふるまいによって、かれにたいするエマの評価がきまるからである。「もしもかれがその点で欠けるところがあったとしたら、それをつぐなうものは何もないであろう。しかしその二人がいっしょにいる場面を見るとすぐ、エマは「すっかり満足した」のである。フランクの言葉にも、態度にも、「ウェストン夫人を友とみなし、その情愛を確保したいと思う気持ち」が、きわめて感じよく表明されていたからである。しかし翌日になると、フランクにたいするエマの高い評価はややぐらついた。フランクが散髪をするためにロンドンへ行つたと聞かされたからである。たったそれだけのことで、十六マイルの馬車の行きかえりである。「見えぼう、浪費、変転のこのみ、気分の落着きのなさ」を立証するものであり、ウェストン夫妻の楽しみなど意に介せぬふるまいであつた。父は「おしゃれ」だからと言ひ、ウェストン夫人は若い人の「ちよつとした気まぐれ」とだけ言つた。

ところで、ジェーン・フェアファックスも帰郷するといううわさを聞いたエマは、ミス・ベイツを訪問して、そのことをねんごろにききただと、ミス・ベイツはつぎのように言つた。

「親切、まことにありがとうございます！　そうなんです、あの娘がこんなにすぐに帰つて来ることにつきましては、こんな特別な事情がなかつたのでしたら、あたしどもも聞いていなかったことなんです。母も喜んでいるんです、とつても！」と申しますのは、あの娘は少なくとも三カ月あたしどものところにいるからでございます。今に読んでさしあげますが、はつきり三カ月と書いています。実情はですね、キャンベル家のお二方がアイルランドへ行かれることなんです。よ。ミセス・デイクソンがお父さまとお母さまに、すぐ会いに来てくださいて、口説きおとしなされたのですね。お二方さまは、夏まではいらっしゃるおつもりはなかったのですが、あのお方がしきりにも一度会いたがっていらっしゃるので

す、——と申しますのは、去年の十月に結婚なさるまでは、お二方さまから、一週間だってお離れになることはなかったものですから、きつい督促の手紙をお書きになったのでございます、お母さまあてに、——それともお父さまあてに、どちらだかあたしにはわかりかねると申しあげますが、もうすぐジェーンの手紙を見ればわかりますことなんで、——ご自分の名前ばかりでなく、ミスタ・ディクソンの名前も書きそえて、お二方さまにすぐにいらっしゃるようにせがんだのでして、このご夫妻がダブリンでお二方さまをお出迎えして、それからご夫妻の田舎邸宅へおつれしてもどられるのでしょうか。ペイリクレイグと言つて、美しいお屋敷だとあたしは思います。その美しさをジェーンはたんと聞いていたのです。ミスタ・ディクソンから、ですね、——ほかの誰からも聞いたことはないと思います。でも、そのお方が求婚していらっしゃったあいだに、ご自分のお屋敷のことを話したくなられるのは、至極当然なことでありまして、——それにジェーンは、お二人とごいっしょに、よく散歩に出かけていましたので、——と申しますのは、キャンベル大佐と奥さまは、お嬢さまがミスタ・ディクソンお一人とたびたび散歩に出られることのないように、とってもこまごまと氣をつかつていられたからでして、——あたしだったら、お二人だけの散歩をしたって、ちっとも悪くはないと思うのですけれどもね。もちろんミスタ・ディクソンが、アイルランドのご自分のお屋敷のことで、ミス・キャンベルに言っていらいちゃったことは、ジェーンも残らず聞いていたのです。そしてお屋敷の画を、ご自分でお描きになった風景画をです、二人にお見せになったと、ジェーンが知らせてきたことがあったと思います。とっても氣だてのやさしい、チャーミングなお若い方だと思われましますのよ。いろいろお話してもらったことから、ジェーンは、アイルランドへぜひとも行きたがっていましたの。

このミス・ベイツのあどけないおしゃべりがきつかけとなつて、器量も才芸も、ミス・キャンベルに断然まさっているジェーンと、チャーミングなディクソンとのあいだに、エマは、なんだか一脈相通するものを感じたのである。だからこそ、ジェーンは行きたくてたまらなかつたディクソンのペイリクレイグ邸には行かずに、ハイベリへ来ることにしたので臆測されたのである。ところで、エマがウェストン夫人やフランクといっしょに買物

に出かけたとき、南英の海港ウェイマスで、キャンベル家の人たちと来ていたジェーンに、フランクは何度も出会ったと言ひ、キャンベル家の人たちとは、すでにロンドンで多少知りあつていたとも言つた。しかしその後、ジェーンが祖母のベイツ夫人とハートフィールド邸を訪れたとき、ウェイマスやディクソン夫妻のことが話題になつたが、ジェーンは万事ひかえめで、なにも言わずじまいであつた。ジェーンの隠しだてに、エマは嫌惡を感じた。

※

ハイベリに住みついて数年になるコール家は、小売りの商売でこの一二年に大儲けをして、資産でも生活ぶりでも、ハートフィールド邸に次ぐものになつていた。しかも愛想があつて、氣前がよく、見えをはらない善良な人びとであつたから、素性からいつて格の低い家柄であつたが、夜会を催すと、エマの懸念にもかかわらず、エマをもふくめて、招待された上流の人びとはみな集つた。そして早目に到着したエマはコール夫人から、ミス・ベイツの家にすばらしいピアノがおいであることを聞いた。それは夫人が訪問した前日に、ロンドンのブロードウツド商社からジェーンに送りとどけたものだが、贈り主は不明なので、ジェーンは驚き、喜び、戸惑つてゐることであつた。もちろんキャンベル大佐からの贈物にちがいない、とコール夫人は言いそえた。しかしそのあとでエマは、フランクと話したときに、かれの意見をさぐりながら、ピアノの贈り主はディクソン夫人か、ディクソン夫妻か、でなければ、ディクソン個人でなければならぬと推定した。「かれはジェーンの方の友だちに結婚を申しこんだのちに、不運にもジェーンに恋をしたか、それとも、かれはジェーンの方に多少の愛情があることに氣づいていたか、」そのどつちかであると、エマは臆断せざるを得なかつた。ディクソンは、ミス・キャンベルの音楽よりも、ジェーンの音楽の方が好きであつた、とフランクは言つた。しかもディクソンはジェーンの

生命を救ったのである。ウェイマスの舟遊びのパーティのとき、舟から突然海へ落ちそうになったジェーンをデイクソンが抱きとめた現場を、フランクは目撃したと断言した。添いとげられぬ恋のための、身投げではないかと思われる出来ごとであった。間もなくハリエットが到着したが、めそめそしないで、愛くるしくほがらかにして人なかにいるのを見て、エマはうれしく思った。自分の友だちの夫に愛される危険な楽しみよりも、人をむなしく愛したことのくやしきの方を、エマは選びたいと思った。

さて、夜会には馬車がつきものである。自家用がなければ貸馬車を調達しなければならない。貧しいミス・ベイツがジェーンをどのようにして連れて来るかが話題になったが、実は二人ともナイトリが馬車にのせて来たことがわかり、そして帰りも同様に予定されていることが、ウェストン夫人によって強調された。というのは、ナイトリの私心のない純真な慈悲心はさることながら、かの女の頭のなかでは、ナイトリとジェーンとの縁組を思いついていたのである。それでそのことを夫人がエマに話すと、エマは猛然と抗議した。第一、ナイトリのドンウエル・アベイ邸とその財産は、ジョン・ナイトリの長男ヘンリが当然相続すべきものであった。しかも「きわめて恥ずべき格下げの結婚」とみななければならない。「ねえ、ミセス・ウェストン、縁組のとりもちなんか手がないでくださいよ。とんでもないことをしでかしますわ。ジェーン・フェアファックスがああのアベイ邸の主婦だって！ ああ、それは、それはダメ。ありったけの感情が反抗するんです。あたしだったら、あの人には、あの人自身のために、そんな気持ちが沙汰はさせませんよ。」とエマは真剣に言った。食後の応接間のつどいでは、フランクがしばしばジェーンに目をそそいでいることに、エマは気がついた。エマにそのことを指摘されると、フランクは何気なく、ジェーンの髪の格好が風がわりだからと答えた。余興にジェーンがうたった二番目の歌声は、しまいの方でかすれていた。ジェーンのそばで、そのことをつべこべ忠告していたフランクを見て、かれは

自分の声をひけらかしているだけだ、とナイトリは批判した。エマは帰宅してから、ピアノの演奏でも、歌いかたでも、残念ながら、ジェーンに劣っていることを率直に自認して、「幼いころに怠けていたことを心そこから嘆き悲しみ、そして腰をすえて張りきって、半時間もピアノの練習をした。その後フランクは、ベイツ家にたびたび立ちよって、老いたベイツ夫人の老眼鏡に、はずれたビョウを根よく修繕してはめてやった。かれはまた、ハイベリではダンスの機会が少なすぎると言って、町なかの旅館クラウン亭の大広間を借り、かれの主催で舞踏会をする準備をしていたが、養母の急病で、ロンドンへ急行しなければならなかった。かれは出発前にエマを訪れ、この十四日間の毎日はすばらしく楽しかったのであるが、「ハートフィールド邸への多くの愛情がいちばん熱烈であった」と言い、「エマが思いもよらぬほどにエマを恋している」ような口吻をもらしたのである。

エマは慎重に反省してみた。自分が恋をしていることに疑いはなかった。問題はその恋愛の程度いかにかかっていた。そしてけっきょく、恋愛に深入りできるタチでないことを自認しなければならなかった。実はフランクだって、かの女自身の幸福に欠くべからざる存在ではなかった。今の程度の恋心で十分であった。しかし、フランクの方はあらゆる点からみて、たしかに深く恋しているとみられた。そこでエマはこう考えた。

……それでも、あたしは警戒しなければならぬ。それは、かれの愛情が現状のままにつづく想定する点にある。しかしそのようにつづくものとは期待されぬと思う。かれがまさにそのような人物だとはみなされぬ、——かれの堅実さと節操がそっくり頼りになるとは思わぬ。——かれの感情は熱烈であるが、すこし変りやすい感情だと想像される。

そういうわけで、フランクはまあおことわりという結論になった。そのうちにフランクがハリエットを「美しい可愛い友だち」と言ったことを思いだした。そうすると、ハリエットこそ、自分にひきつづいて、かれの愛情

にあずかるべきだとエマは思いついた。「こまやかな愛情に匹敵する魅力はない」のである。エマはハリエツトとの対談のあとで、つぎのようにひとりごとを言った。

……ハリエツトは、こまやかな愛情があたえるすべての魅力やすべての幸福という点では、あたしにまさっている。いいハリエツトよ！ あたしはあなたを、この世に生きているもっとも頭脳明晰な、もっとも先見の明がある、もっとも正しい判断をする女性とでも、とりかえることはしませんよ。ああ、ジェーン・フェアファックスのような女性の冷たさ！ ハリエツトはそんな女性の百人分の値うちがある。——そして人妻としては——思慮分別のある人の妻としては——この愛情がこの上なく貴重である。その人の名ざしはしないけれども、幸福なるかな、エマをハリエツトととりかえる人は！

ハリエツトを対照にしたエマの自己批判は、みずからの人間像をも浮きぼりにするものである。ところで、ジェーンの冷たさというのは、ナイトリからみれば、かの女に感情がないということでは決してなく、感受性は鋭く、気性は辛抱づよさと自制の点ですぐれていた。足りないのは、わだかまりなく胸襟をひらくことであった。そしてかれが好きなのは、隠しだてのないさっぱりした気性であった。かれはミスタ・コールから、ジェーンに思しめしがあるのではないかと邪推されたが、そう言われるまでは思いもよらぬことであった。ジェーンを見、ジェーンと話すことは、いつもすばらしいと思い、心たのしいのだが、ただそれだけのことであった。そういう意味のことをナイトリはエマに話した。

※

チャーチル家は夫人の療養のためにリッチモンドに移転することが、フランクの手紙でわかった。そこはハイベリから九マイル、馬に乗って行けば一時間である。フランクはハイベリへ来やすくなった。そこで、クラウン

亭の舞踏会が大々的に催されることになった。まずウェストンとエルトン夫人とが組んでリードし、フランクとエマがそれにつづいた。エルトン夫人は最初にフランクと踊りたかったけれども、リードすることで虚荣心は満たされた。エマは、踊らずに傍観しているナイトリが気になった。といっても若く見え、背高で、がっしりとまっ直ぐな姿は、年輩者らのかさ張った格好や猫背のなかで、人目をひくにちがいないと思われ、若い連中のなかでも、今のパートナーのフランクのほかには、かれに匹敵するものは一人もいなかった。二三歩近づいたかれのステップの踏みかたでは、紳士らしい見ごとなダンスをした経験があったはずである。エマはかれと目があうたびに、かれを嘲笑ませようとしたが、概してしかつめらしい顔をしたままであった。フランクにたいするかの女の愛情はもうなんでもないものになっていた。フランクだって、かの女のことを以前ほどに思っていないことはたしかであった。それにしても、ナイトリは踊っているエマにしばしば目をそそいでいた。

ウェストン夫人の斡旋で、舞踏会はたのしく進行した。ところが、晚餐の前のダンスがはじまったとき、若い女性のうちで、ハリエットひとりだけが相手なしに腰をおろしていた。それまでは踊り手に端がでないように仕組まれていたので、エマは怪げんに思っていると、ぶらついているエルトンが目にとまって、なぞは解けた。しかるにエルトンはハリエットのまん前に行きながら、かの女にはそしらぬ顔で、かの女のそばの人たちに話しかけていた。ウェストン夫人が近よって、かれにダンスをすすめると、あなたとだったらと言う。あたしは踊れないと受けながされると、ギルバート夫人のような古いお友だちと踊りたいと言った。ギルバート夫人は踊るおつもりはないが、お相手のきまっていけないお若い方がいらっしやると言って、ミス・スミスと名ざしすると、さかさずエルトンはこう言うのである。「ミス・スミスって！ おや！ 気がつきませんでしたね。——ご親切まことにありがとうございます——わたしが年をとった妻帯者でありませんでしたら、——でもわたしのダンス時代はもう過ぎ

ましたよ、ミセス・ウェストン。ごめんなさい。そのほかのことなら、お指図どおり喜んでいたします——しかし、わたしのダンス時代はもう過ぎましたよ。」エマはハリエットのくやしさが察せられ、これがあの「氣だてのやさしい、親切な、温和な」エルトンの言い草かと、あきれてしまった。しかも、かれとかれの妻とのあいだに、ほくそ笑みがとりかわされていたのである。ところが次の瞬間に、ナイトリがハリエットをダンスの群れへリードして行くのである。そのときほどにエマが驚き、かつ喜んだことはなかった。食後にナイトリから、ハリエットをエルトンと結婚させようとしたことについて問いただされたエマは、すなおにその非をみとめ、反省している気持をかれにうちあげた。それから、急にナイトリが音頭をとって、さあ踊ろう、ということになり、エマはみずから求めてナイトリと踊った。

翌朝はリッチモンドへ行くので来ないはずのフランクが、ハリエットを腕にもたれかけさせて、ハートフィールド邸の門からはいって来るのを見たエマは、すぐに異変があったらしいとカンづいた。ハリエットはホルの椅子にぐったりして、気をうしなった。ハリエットが同じ寮生のビッカートンと郊外の朝の散歩をしていたとき、道が曲ってニレの木が両側に鬱蒼としているところで、突然にあらわれたジプシイの子にもの乞いされた。友だちは足ばやに逃げたが、ハリエットはダンスのあとの筋のひきつりで逃げおくれ、たちまち十人ほどのジプシイの子供らにとりかこまれた。こわくなってシル与えると、もっとくれとたかられて、ハリエットはおびえきっていた。そこにフランクが来あわせて、かの女を救いだしたわけである。夏もまじかな朝のさわやかさを楽しむために、馬車は別の道にまわして待たせておいて、かれが同じ道を歩いて来たのが幸運であった。ともかくこの出来ごとによって、フランクとハリエットの結びつきは緊密になったとエマは考えた。数日後にハリエットが、大事にしまっていたエルトンの古鉛筆を焼きすててから、もう結婚はしませんがとエマに言ったとき、ハリエ

ットには、とうてい結婚はできないけれども、意中の人があることをエマにほめかした。その意中の人はフランクにちがいないと思いきめたエマは、ハリエットのそのような目のつけかたを、かの女の品格を高めるためにいいことだと思った。

※

六月の半ばになって、婦人連はボックス・ヒルへの楽しいピクニックを計画していた。しかしその前に、ナイトリのドンウエル・アベイ邸でイチゴ狩りが催された。エマの父ウッドハウスは、かれのために火をいれた暖炉のそばから離れなかったが、婦人たちは木陰に集っていた。そこではエルトン夫人が、姉のサックリング夫人の知人ブラッグ夫人のいところで、姉のメイプル・グローヴ邸でも知られている令夫人の家に就職することを、ジェーンにほこらしく、強引にすすめていた。こんないい勤め口はないのだから、明日の郵便で承諾の返事をだしてもいいか、としつこくたたみかけていた。ジェーンには家庭教師の資格があったからだ。しかしジェーンは、今のところ就職する意向がないことを明言して、そしてその理由としてすでに何度もいったことをくりかえし言っただけでも、エルトン夫人は受けつけないふうであった。よくもジェーンは我慢できるものだと思つた。手入れの行きとどいた緑一色の広大な屋敷を散歩することになったが、ナイトリとハリエットがみなから離れて、ロバート・マーティンのいるアベイ・ミル・ファームの美しい眺めのきくあたりを歩いていた。その二人に追いついたエマは、マーティンとハリエットのことを思いだしていた。それからのち、エマがホールへはいると、ジェーンとばったり会った。ジェーンはいきなりエマに、あたしが居ないとわかったら、帰つたと言つてください、と頼みこんだ。ひどく疲れているが、歩いたら元気になると言い、そしてさらに、ひとりでいたいと思うことがときどきあります、と言いのこして去った。友人をあわれむ熱意をこめて、エマはジェーンを見おく

った。それから十五分もたたないうちに、フランクが部屋にはいつてきた。チャールズ夫人の急性の神経病が遅参の言いわけであった。ひどい暑さで、暑さにはたえられないフランクは、見るもあわれな顔つきであった。来る途中で歩いている人に出会ったが、この暑さに気がい沙汰であると言った。その人がジェーンであったことに、エマは気づいていなかった。そしてエマは、朝が暑いぐらいで心をみだす男は好きになれないと思った。しばらくすると、フランクはこう言うのである。「無為であることにあいちゃった。変化がほしいなア。……イギリスにはうんざりした。できたら明日にでも、イギリスをたち去りたい。」それを聞いてエマが、あちらで冷肉をも一つ食べたら気がしずまりますよ、と言うと、「いや、あなたのそばにいる。あなたがいちばんの薬だ。」と言って、そしてリッチモンドへすぐひっかえすはずだったフランクは、エマにさそわれて、翌日のボックス・ヒル行きのために居残ることになったのである。

ボックス・ヒルでは、エマは最初つまらなさそうにしていたが、フランクがそばに来て、エマだけを目標にして陽気にしゃべったので、エマも気をもたせるようにしむけて、至極たのしくかれに調子をあわせた。はた目には「いちゃつき」としか受けとれないほどであった。しかしエマにとっては、フランクは単なる友人のつもりであった。かれの方から愛情をよせてくるから、かれを憎からず思うのであるが、かの女自身の愛情はもとにもどらなかつた。ともかく、二人が話していることの一端をしめすと、「口にだして言っても、言わなくても、あなたはよくに指図をしますね。そして、いつもあなたはよくといっしょにすることができますよ。いや、いつもいっしょにいるのです。」「昨日の三時からのことですね。」「それはあなたの日づけですよ。よくがはじめてあなたに会ったのは二月ですよ。」かくしてはしゃいだフランクは、ついにつきのようなことを言って、ミス・ベイツとエマとの応酬を誘発した。

「紳士淑女のみなさん——ぼくはミス・ウッドハウスから指示をうけましたので申しあげます。かの女は、みなさんが今なを考えていらっしゃるのであるうか、そのことを的確に知る権利をふりまわしているのでありますが、みなさんの一人一人から、ふつう一般に言って、すぐくおもしろいことを言ってほしいと思っただけであります。ここにみなさんは七人いらっしゃいます。ぼくは別にいたしまして、（ぼくはすでにすぐくおもしろいとかの女は言っていますので）。ところでみなさんの一人一人からの女が要求していますことは、ただ、すぐく気のきいたことを一つ、それは散文でも詩でも、新作でも旧作でも、かまいません。あるいは、かなり気のきいたことを二つ、あるいは、実にひどくくだらんことを三つ、というのでありまして、そのどれにも、かの女はシン底から笑うと誓っているであります。」

「ああ！ わかった。」とミス・ベイツは大声で言った。「それじゃ、あたしは心配しないでもいい。『実にひどくくだらんことを三つ』それがあたしにはうってつけですわ、ねえ。いつでも口をひらいた途端に、あたしはきつとくだらんことを三つ言うのでしょう、そうじゃありません？ ——（一人のこらず、同意してくれるものと、しごく上機嫌に信賴して、ぐるっと見まわしながら）——みなさんはそうだと思ひになりますか？」

エマは言わずにおれなかった。

「だって！ あなた、一つむづかしいことがあるかもしれませんよ。失礼ながら——あなたは数の方で制限されるでしょう——一度に三つだけですのよ。」

ミス・ベイツは、切り口上めかしたかの女の言いかたに惑わされて、かの女の真意がすぐにはのみこめなかった。しかしハッとして思いあたったとき、そのために、腹をたてることはようしなかったが、かすかに赤面したことで、心を痛めていることはたしかだった。

「あッ！——そうだわ——なるほどねえ。ええ、わかりましたわ、あの方が言っただけのことか。（ナイトリの方を向いて）それでは、あたしは口をつぐんでいるようにいたしますわ。自分で自分を不愉快なものにしているにきまっています。でなければ、あの方が、古い友だちにあんなことはおっしゃらなかったでしょう。」

エマの言ったことで、ミス・ベイツはみんなの前で、しかも愛する姪の前で、こつびどく悔辱されたわけである。そのことについては、あとでナイトリから峻厳に諫言されて、エマは神妙にその非を悔いたのである。今は貧素なミス・ベイツであるけれども、世が世なら、なに不自由のない身分であった。しかもあの気のいい性格で、あの年で、怒ることもようしない立場の婦人にたいして、なんという野卑な、残酷な、傲慢な仕うちであったかということ、ナイトリから諄々と説き聞かされたのである。エマは自責の念に堪えかねる思いであった。——あとさきになったが、さっきのミス・ベイツの言葉にひきつづいて、ウェストンは、アルファベットのなかで、「完全」をあらわす二つの文字は何か、という文字謎をかけた。フランクが解きかけたがダメなので、ウェストンはエマの方を向いて、それはMとA、つまり‘Enigma’だと言った。エマは大いに笑った。しかしナイトリはおごそかに言った、「完全がそんなに直ぐにできてはいけなかった」と。張りあうことの好きなエルトン夫人は、自分の名にかけた「アクロスティック」(各語の頭文字を組みあわせ、新しい語句にする文字謎)を送られたことがあるが、いっこうにおもしろくなかったと言い、「ミス・イー(夫エルトンのこと)と、ナイトリと、ジェーンと、あたしはごめんにしてください。あたしたちには気のきいた言い草なんかないんだから」と言うと、エルトンはすかさず賛成し、そして「さあ、ジェーン、あたしの空いてる腕をとりなさい」とエルトン夫人が言ったが、ジェーンがこわったので、エルトン夫妻は二人だけで歩いて行った。フランクはそれを見て、「仕あわせな夫婦」だと言った。この二人はバースで知りあって、わずか二週間で幸福な結婚をしたのだが、世間にはちょっとした知りあいでも結婚して、そして一生涯後悔するものが多いのだ、とフランクは言った。ところが、自分の幸福が偶然によって支配されるような、そんな優柔不断のよわい性格の人にかぎって、不運な知りあいを苦しい重荷にするのですと、ジェーンはきっぱり言っ

た。しかしフランクはそれには答えないで、エマとつぎのような問答をした。——「誰かぼくのために妻をえらんでほしいなア。……あなた、誰か見つけてくださいよ。急ぎはしません。養女にして教育をつけてくださいな。」「そしてあたしに似た女になさい。」「おできになりますなら、ぜひとも。」「わかりました。お頼みはひき受けます。チャーミングな奥さんをもたせてあげますよ。」「とっても快活で、ハシバミ色の目をもった女でなくちゃいけませんよ。」——ハリエットがまさにその女だ、ハシバミ色の目はさておき、もう二年もすれば、すべてかれの註文どおりになるであらう、とエマは考えたのである。こうしたうわつ調子ではしゃいだ気分のもとで、エマはナイトリから、ミス・ベイツのことで頂門の一針を蒙ったのである。

※

エマは悔恨の念にかられて、翌朝早くミス・ベイツを訪れた。奥に人声がしてとりこんでいるようであったが、ミス・ベイツはころよくエマを迎え、ジェーンがエルトン夫人の世話で、メイブル・グロウヴ邸から四マイルしか離れていないスモールリッジ夫人の邸宅に就職するために、二週間以内に出発することになり、たいへんいい勤め口なので喜んでゐるが、別れるのがつらいと話した。それでジェーンはキャンベル大佐あてと、ディクソン夫人あてに、朝中かかって涙ながらに長い手紙を書き、そのためひどい頭痛がして出てこれないと言った。エマはジェーンをいたわりたい気持ちになった。ところでその翌日、リッチモンドからランダルズ邸へ急使が来て、チャーチル夫人の死を知らせた。そうすると、フランクは自由の身になったのであり、ウェストンへのその後のフランクの手紙では、養父チャーチルは予想外にいい人であった。ハリエットへのかれの愛情をさまたげるものはなくなった、とエマは考えた。ハリエットの将来の見込みはひらかれ、それにくらべてジェーンのそれは閉ざれつつあるわけである。そう思うと、エマはジェーンのために役だちたいと思った。しかもジェーンはす

っかり健康をこわして、頭痛がはげしく、食欲が全然なかった。ペリ医師の診断では肺病ではないらしいが、ミス・ベイツの看護も支障になるほどであった。エマはなんとか力になりたいと思って見舞ったが、ジェーンはエマをなかへ入れないように、ミス・ベイツに堅く約束をさせていたらしい。エマはジェーンに会えずに帰ってから、上等のくず粉 (arrow-root) をもたせてやったが、半時間すると、ジェーンが食べられないものだからといって、返えされた。エマが気ばらしに馬車の同乗をすすめると、運動はできぬ体だからとことわったジェーンが、その日の午後に、ハイバリの近くの牧草地を散歩していた、とエマは聞かされた。ジェーンはエマからどんな親切も受けないと決意していることがわかって、エマは悲しい思いをした。しかしかの女のこの真意がナイトリにわかれば、かれにとがめだてされることではないとエマは考えた。

チャーチル夫人が亡くなってから十日ほど経ったころ、ウェストンがハートフィールド邸に来て、エマに知らせたいことがあるので、午前中にランダルズ邸へ来てほしいと伝えた。それですぐに二人は連れだてて行くことになり、エマは途中でその知らせをかれから探りだそうとしたがむなしく、けっきょく同邸で、ウェストン夫人の口から、フランクとジェーンの婚約が発表された。エマは冗談だと思ったが、フランクがその朝来て言明した事実であった。二人はすでに昨年十月に、ウェイマスで厳粛な婚約をしていたのであるが、それは誰にも秘密にすることを誓っていたのである。チャーチル夫人とキャンベル大佐に知られることがこわかったのだ。——そうすると、ハリエットがまたかわいそうなことになった、とエマは思わざるを得なかった。そして、エマにたいする最近のジェーンの仕うちは、嫉妬によるものとわかった。ジェーンからみれば、エマはまさにかの女のライヴァルだったのである。

ところでハリエットも、この婚約のことをウェストンから直接に聞いて知っていた。しかしそれにしては、か

の女の人柄がすっかり変ったようであつた。それを知っていて、うろたえる風もなく、落胆もせず、悩んでいる様子もしていなかったからだ。そしてハリエットはこう言うのである。

……そのお方がほかの誰よりもはるかにすぐれていることを考えますと、あたしの意中に、そのお方以外の人がいるなどと想像されることはあり得ないと思つたのですけれど。ミスタ・フランク・チャーチルなんて、まさか！ かれなんか、そのお方と同席したら、かれに目をつけるものが誰がきましょう。そのお方のそばではとるに足らないようなミスタ・フランク・チャーチルを思うほど、あたしの趣味は低級でないと思います。……はじめあなたが、もっとすばらしいことが起つたと、もっと不釣合の縁組（とあなたはおっしゃつた）があつたと、あたしに言つてくださらなかったら、あたしはどういてそんな気になる勇氣はなかつたでしょう。でも、そのお方としゃうちゅう親しくしていらっしゃるあなたでしたら……

ハリエットがそこまで言つたと、「あなたが言つてゐる人は——ミスタ・ナイトリなの？」とエマはさげんだ。ハリエットは即座に肯定した。しばらくして、「ミスタ・ナイトリがあなたの愛情に愛情をかえしてくれると思つてゐるの？」とエマが言つと、「ええ、そうですと言わねばなりません。」と応答したのである。エマは腰をおろして考えこんだ。二三分で、自分のほんとうの情念をさることができた。「ハリエットがミスタ・ナイトリに恋することが、フランク・チャーチルに恋することよりも、なぜかずっといいことであつたか。ハリエットが愛情のかえしを期待することによって、なぜ禍がそんなに無氣味に大きくなつたのか。矢のようにすばやくかの女の身うちを突っぱしつたものは、ミスタ・ナイトリがかの女自身以外の誰とも結婚をしてはならない、ということだつた。」そしてその同じ二三分に、みずからの情念ばかりでなく、みずからの行為が、エマの眼前に浮びあがつた。なんと思ひやりのない、なんと野卑な、なんと非常識な、そしてなんと無情な行為であつただろう、

そしてなんとという盲目に、なんとという狂気に、ひきずられていたことだろう、とエマはしみじみ慨嘆した。ハリエツトがたち去ったとき、エマは言った、「しまった！　かの女に会ったことがなければよかった！」

いつからナイトリに心をひかれたのか、かれのそれほどの魅力がいつはじまっていたのか、短期間ながらフランクが一時占めていたかの女の愛情の座に、かれがいつすりかわっていたのか、そのことを究明していくうちに、エマはすべて幻想の虚妄のなかで模索していたことがわかった。この上なく悲しく腹がたった。自分のすべての感情が恥かしく、自分の心のすべての部分がいまいました。しかしただ一つ、ナイトリへの愛情だけがそうでないことを確信することができた。作者はつぎのように記述している。

かの女は鼻もちならぬほどに自惚れて、あらゆる人の感情の秘密がわかっていると信じ、許しがたいほどに傲慢に、あらゆる人の運命をとりきめようとしたのだ。かの女はなにもかも思いちがいをしていたことが証明された。そしてなに一つちやんとしあげたことはなかった——というのは、かの女は災害をひきおこしたからである。かの女は禍をまねいたのだ、ハリエツトに、かの女自身に、そしてどうもナイトリにも、ではないかとかの女はひどく気になった。

ところで、エマはナイトリにとって、「すべての人間のなかで、いろいろ欠点はあるながらも欠点のない、もっとも気だてのいい最良の人」であった。そのエマはかれにたいして、「しばしばぼろで片意地であり、かれの忠言を無視し、かれに故意に「反対し、かれの真価には半分も気づかず、自分自身についての自分のまちがった驕慢な評価を、かれがどうしてもみとめてくれないので、かれと口論した」ことを反省していた。しかし七月の夏らしい晴れ間に、二人がハートフィールド邸の庭園を連れだって散策していたとき、ナイトリはエマに、フランクは「男の名をはずかしめるものだ」と言ったのち、「フランクが羨ましいと思うことが一つある」と言った。

そして、「友人としてあたしにあからさまに言いたいことがありますなら、聞かせていただきます」とエマが言う
うと、「友人としてだって！」とかれは言いかえし、そして「実意のこもる、きっぱりした、それとすぐにわかる
愛情こまやかな、かなり説得力のある口調」で、ミスタ・ナイトリはエマにつきのような求愛をしたのである。

……もしもわたしがあんたをこれほどに愛していなかったら、このことについて、もっとしやべれたのだがね。しかしあんな
たがわたしから聞くのはただ真実だけである。——わたしはあんたをとがめ、あんたに説教をしてきたのだが、それをあんな
たは、イギリスのほかの女だったら、誰もよう我慢できなからうほどに、我慢してくれたのだ。——今わたしが言いたいと
思う真実にも、かけがえなくいいエマよ、今までの真実と同様に、我慢しておくれ。たしかにわたしはひどく冷淡な愛
人であった。——しかしあんなはわたしをわかってくれる。もちろんわたしの気持はわかってくれるね——そしてその気持
に、できたらお返しをしてくれるだろうね。今はただあんなの声を聞かせてもらいたい、一度だけ聞かせてもらいたいの
だ。

こうしたいきさつのあとで、フランクの長い告白の手紙がウェストン夫人あてにとどいた。エマとナイトリはその
手紙の文面に関連して、フランクと、ジェーンと、エマ自身と、ハリエットをめぐる迷惘や、批判や、反省を
とりかわした。それからのち、ナイトリはエマにこう言ったのである。

……自然があんたに理解力をあたえていた。ミス・テイラーがあんたに道義をあたえていた。あんなのしたことは立派だっ
たにちがいない。わたしの干渉は、有益であったと同じほど有害だったのだ。この人はどんな権利があつてあたしに説教す
るのかと、あんたが言うのはしごく当然のことであつた。——しかもそういうことを、わたしは不愉快なやりかたでして
たのではないかと思う。わたしがあんなに益をほどこしていたなどとは思っていない。益はすべてわたしの方にはどこさ

たのだ。わたしにとって、またとないこまやかな愛情[★]的に、あんたをしたからなのだ。いろいろな欠点ぐるみに、あんたが可愛くてたまらなく思うことがなかったら、これほどにあんたのことを考えるはずはなかっただろう。そして、かくも多くの過失を想像することによって、あんたがせいぜい十三歳だったところから、あんたに恋をしていたはずはなかっただろう。かくしてエマとナイトリは相思相愛となり、しかもナイトリが進んでハートフィールド邸に移り住むことを申しで、ドンウエル・アベイ邸とその財産はジョン・ナイトリの長男ヘンリに相続させることになり、エマとエマの父はもうなにも懸念することはなく、二人は十月に結婚することを取りきめた。

※

フランクのウェストン夫人あての手紙の要点は、エマとジェーンとにたいするかれの言動の弁解であった。かれのおもてむきの目標であったエマは、最初はかれに愛情をよせてきそうに思われたが、実際はそうでないことが、かれにわかっていった。かれのエマへの求愛は、氣さくに陽気にふざけてあしらわれた。悟りのはやいエマがなにかを多少カンぐっていたことはたしかだと思った。やかましく取沙汰されたピノは、音楽好きのジェーンをよろこばすために、かれが贈ったものだった^(ロンドンへ數回に行ったときに註文したらしい)。名前をふせたのは、こまかい心づかいをするジェーンだから、そうとわかればことわるにきまっていたからだ。かの女の病氣の容態を至急にくわしく知らせてほしい。かの女的美質と忍耐と、そして養父チャーチルの寛容とによって、ジェーンとの思いがとげられ、かれは狂喜している。ところで、エマにたいするかれの態度は、ジェーンには不愉快だった点で、大いに非難されるべきものであった。婚約の真相をごまかすためだというかれの弁解を、ジェーンは十分だとは思わなかった。それでかの女は不機嫌になった。かれはかれで、そういう氣持になるのは非常識だと思った。かの女が不必要に慎重で、用心ぶかくありすぎると思うことはたびたびのことであった。かの女は冷たいとさえ思うのだった。ド

ンウェル・アベイ邸のパーティでは、かの女の胸にたまっていたくさぐさのちよつとした不満が危機をはらんでいた。第一かれが遅参したことがいけなかった。かれはかの女がひとり歩いて帰るのに出会ったが、かれといっしょに歩くことをかの女は拒否した。連れだっているのを見られたら、婚約のことを世間に知らさないようにしてきた努力がフイになるというのである。かれはジェーンの愛情をうたがった。翌日のボックス・ヒルでは、そのうたがいさらにひどくなつた。かの女の冷たさに、かれは感情を害した。かの女はおせっかいなエルトン夫人の就職斡旋を受諾した。総体にエルトン夫人のジェーンのあしらいかたについては、かれはいつもむかついて、憎々しい思いである。例えば、かれでさえ言つたこともないのに、「ジェーン」と呼びすてにするのだった。ともかくジェーンは、「この就職のすすめに応じて、かれとはきっぱり絶交することを決意し、翌日手紙を書いて、二人は絶対に二度と会わないことになる」とかれに伝えたのである。その手紙は養母が死んだ朝にといた、ジェーンを病気にしたのはかれのせいだとみとめていた。――全快したジェーンはふたたびロンドンのキャンベル家へもどり、チャーチル家もロンドンにひきあげ、ジェーンとフランクは十一月の結婚を待つばかりであった。エマはハリエットとの間柄が微妙になつて、かの女を不幸にしたことの苦痛におとらず、かの女のことをナイトリに隠しだてなければならぬ苦痛にもなやんだ。ところでナイトリはジョン・ナイトリ夫妻とはかり、夫妻はハリエットをロンドンの自邸にまねいた。かの女は齒の治療をする必要もあつた。それがすんでも滞在するようにされていたが、気は沈みがちであつた。そのうち、ナイトリがジョン・ナイトリにわたす書類をロバート・マーティンにもたせてやつた。そして夫妻はアストレイ座の観劇や晚餐で、ハリエットをロバートと同席させた。ロバートは今でもハリエットを愛していた。ハリエットはかれをきらっていたわけではなかった。しかも、愛されればイヤとは言えない、人のいい、思いやりの深い氣だてであつた。ナイトリはロバートを信頼して

いたから、かれの身分をひきあげることを考えていた。ハリエットの父親はロンドンの裕福な商人であることがわかった。九月の下旬に、ハリエットはエマにつき添われ、エルトンの司祭で、ロバートと結婚した。それから一月たらずのうちに、エマとナイトリの手も、エルトンによって結ばれた。その結婚式は、双方が美服や盛観をこのまね他のいくつかの結婚式によく似たものであった。エルトン夫人は、エルトンがくわしく話した一部始終から判断して、その結婚式をはなだみすばらしいと思い、自分の結婚式にははるかに劣ると思った。

※

かくして二組の結婚が成立し、そしてもう一組の結婚が一月後に予定されて、この作品は、オースティンの他の小説と同様に、ハッピー・エンドになっている。ところで、慣例による儀式ではあるけれども、エマとハリエットとが、人もあろうにエルトンによって、それぞれ結婚のかための手を結ばれたことは、一人一人の人物が厳粛にしていると想像される場面であるだけに、読者は微笑を禁じえないであろう。それはすなわち作者オースティンの笑いでもあったと考えられる。しかも最後にエルトン夫人をもちだしたことによって、作者も読者も笑いをかさねることになった。さきの笑いは、人生の皮肉なめぐりあわせが意識されるからであり、あとの笑いは、しみついた習性から一步もふみだせない、人間の運命的な妄執が批判されるからである。前者はヒューマーの笑いであり、最後は諷刺の笑いである。そしてこうした最後の幕切れだけでなく、この小説全体が、「人生の皮肉」と「人間の妄執」をたて糸とよ糸にして、柄模様を織りだす機構になっているのだから、ヒューマーの笑いとい諷刺の笑いが、作品の随所にただよっているのである。しかしそうした笑いがただよっているところに、作者のすみきった観照の眼が「ハンバミ色」(作者オースティン自身の目の色がそうであった)に光っていることを忘れてはならない。それは人間性なるものの現実に透徹した善意の眼であった。批判はあっても憎しみはなかった。評価はあってもさげすみはな

った。人生の矛盾と人間の限界が見きわめられる描写のなかに、人間そのものを愛するしみじみとした感触があった。オーステインの作品はすべてハッピー・エンドにならざるを得なかった。

たとえば、容赦なく批判され、手きびしく評価されたエルトンやエルトン夫人にしても、フランク・チャーチルにしても、そのそれぞれの妄執的な習性それ自体が、あわれみの暈^{かき}をきせられているのである。似たもの夫婦であるエルトン夫妻は、とりわけエマとナイトリから非難排撃的にされがちであった。お高くとまって、考えることは俗っぽく、人の氣心を汲むデリカシイなどはかけらもなかった。ダンスにあぶれたハリエットを辱しめて痛快がる神経であった。とくにエルトン夫人は作中でもっとも不愉快な人物であった。出しゃばって、あつかましく優位の押し売りをするのである。フランクでさえ憤慨する人あしらいをして、恬^{へん}としている。それでもジーン・フェアファックスは我慢してそれに堪え、フランクは「仕あわせな夫婦」だと感じた。エルトン夫妻といえども、この世に居るべきところを与えられて存在していたのである。三つ子の魂百までもであって、地金の金しぼりになっている妄執は脱しきれるものではなかった。また、それを脱しきれような、精神的な機構変革が可能である型の人間ではなかった。そうした人間的な事実、作者の憐憫がそこはかとなくまといつくのである。しかも、フランクがジーンとの婚約を発表しなければならなくなったきっかけが、ジーンに押しつけたエルトン夫人の就職斡旋であり、エルトンがハリエットに加えた侮辱がかの女をナイトリに結びつける因縁になった。エルトン夫妻の存在は、作品のプロットに重要な役割をはたしたといえる。

フランク・チャーチルは美男子であったが、心にもないことをぬけぬけとしゃべることができ、うつり気な軽才子であって、終始ナイトリによってこっぴどく酷評されている。しかしフランク自身にも言い分はあった。ジーンとの婚約を極秘にするためには、エマやナイトリのような明敏な人のいる世間の目に、煙幕を張らねば

ならなかった。そうすることのもっとも自然な手段は、エマに求愛的な態度をみせることであった。ウェストン夫妻はその効果に期待をかけるのを当たり前のことと思ひ、エマもはじめはかれをエンカレッジする気心になっていた。しかしかの女に芽ばえかけた恋心は中途でたち消えになったのであるが、それにもかかわらず、ボックス・ヒルの二人のふるまいは「いちやつき」とみられるほどにふしだらであった。エマの方は單なるふざけのつもりであつたであらうが、衆人環視のなかで、あまりにも度はずれたふるまいであつた。フランクの方は、ジェーンに見せつける魂胆であつたらしい。かれには、ジェーンの慎重すぎる言動が、恋人にしてはあまりにも冷たく、かの女の愛情までが疑わしくなつていたからである。多少やけくそになつていたかれは、万一エマに手ごたえのある反応があつたならば、その場でエマに求婚しそうな危機をはらんでいた。ウェイマスでジェーンと知りあつたかれは、ベースで知りそめたエルトン夫妻の幸福な現状をうらやむような口吻をもらした。そのあてこすりをとらえて、ジェーンはかれを「優柔不断のよい性格の人」と諷した。エマに嫉妬を感じさせられているジェーンであつたのだ。そしてフランクが優柔不断でなくなつて、二人の婚約を言明したことは、かれがジェーンの絶交状によつて活を入れられたからであつた。ジェーンは婚約の秘密をまもりとおすためには、エルトン夫人のありがた迷惑な偏愛にも堪え、ナイトリの好意や賞讃にも自惚れず、愛恋ひとすじに、かれとの結婚を待ち望んでいたのである。節操のかたい、筋金入りのしつかりものであつた。それがたまたま無口になり、隠しだてになり、冷たい態度になつたまでである。いよいよ二人が結婚した場合に、ジェーンの名めらかな肌と特異な肌色が、第一の魅力であつたフランクの気まぐれな頼りなさを問題にするならば、安定した家庭が営まれるかどうか危ぶまれるけれども、ジェーンの誠実とシンの強さによつて、安全感が補なえるであらう。性格の相異によつてかえつて琴瑟相和すということは古来いくたの事例がある。しかもこの小説の中心課題であるエマの性格展

開には、大きな役割を分担しているフランクであった。かれの一言一行に、微笑する作者の諷刺とヒューマーがからみつくゆえんである。

ところで、作者がもっとも忌憚なく批判し、もっとも峻厳に評価した人物はエマ・ウッドハウスであった。しかもかの女は、たとえ誰からも好かれることはないにしても、作者オースティン自身がもっとも愛している人物であった。エマにたいする批判や評価はもっぱらナイトリによってなされている。エマが十三歳のころからほぼ十年間エマを愛しつづけたナイトリである。そのナイトリの愛情はすなわち作者オースティンの愛情であった。しかもエマを見まもるナイトリの背後に、ナイトリ自身をも見まもる作者の眼が光っていた。したがって、ナイトリはしばしば作者オースティンの代弁者になった。つまりエマはナイトリをとおして、作者の評価や批判をうけたわけである。ナイトリからみれば、エマは「甘やかされた驕児」(spoiled child)であった。ハリエットや、ジェーンや、フランクにたいするそれぞれの交渉の場において、エマは驕児の本領を露呈したのである。そもそもエマは、ハリエットをロバート・マーティンから絶縁させ、そしてハリエットをエルトンに熱心にとりもったのであるが、皮肉にもその熱意はエルトンによって、かれにたいするかの女自身の愛情の表示だとカンちがいされた。さらには、根拠のあさいさかしらな揣摩臆測をあえてしてジェーンを見くだし、しかもジェーンの面前で、フランクとどぎつい悪ふざけをして得意がり、それにもかかわらず、ひとり合点によって、ハリエットをフランクと結びつける構想で自己満足をしていた最中に、突然、フランクとジェーンの婚約が発表され、その上さらに、もともとフランクなどは眼中になかったハリエットから、唐突にナイトリへの愛情が告白されたのである。万事が自分の思うようになるときめてかかっていたエマの思いあがりは、むざんに踏みつぶされた。エマの才知が企図したことはすべて失敗におわった。ただ一つ、ウェストン夫妻をとりもったことだけが成功したので

あるが、そのとりもちかたは作品のなかには示されていないし、しかも、その成功がかえってエマを増長させる原因にもなっていた。第一、私生児のハリエットを上流向きのレディにしたて得るという自信に、誤謬があった。そして今では、ハリエットのライヴアルにならざるを得ないどたん場に追いつめられた。あまりにも深刻な皮肉である。ナイトリの意中の女性が十年來エマ自身であったことは、エマにとって幸運であった。しかしハリエットの側からいえば、愛人を横どりされた格好になっていた。エマはふたたびハリエットのために煩悶しなければならぬ羽目になった。けっきょくは、ナイトリとジョン・ナイトリ夫妻の配慮によって、ハリエットはロバート・マーティンとの結婚で落ちつくことになった。しかしこの二人は、エマがあえて絶縁せしめていた間柄であった。エマの人生行路は、皮肉の冷笑によって、二重にも三重にもとりかこまれていたのである。

恋を経験したこともなく、恋のできるタチでもないと自認していたエマが、恋愛をとおしての結婚のなかだちを企てたことに、錯覚と自信過剰があった。エルトンの「即妙な才知」と「やさ眼」^{まなこ}の暗示が、そしてまたフラシクの「ハシバミ色の目」の暗示が、エマ自身への愛の訴えである事実を無視して、エマはその暗示を頭のさえない青い目のハリエットに帰してあやしまなかった。恋愛のデリカシーを解するには、エマはあまりにも鈍感であったといわざるを得ない。自分はゆるがぬ分別の上に腰をすえて、そうした姿勢でのフラシクとの「いちやつき」にすぎなかった。フラシクへの初期の愛の芽ばえは、間もなくかの女の理知の缺でつみきられていた。しかるに、ナイトリへのハリエットの愛情の告白がショックとなって、エマ自身がナイトリへの愛の自覚につきあたった。そうすると、ハリエットの心情など顧慮するゆとりもなく、ナイトリと結婚する女性には自分でなければならぬと決意するのである。身勝手もはなはだしいが、エマはいわば心意の革命的な転機を体験したのである。自信も、プライドも、エリート意識も粉碎されてしまって、エマは単なる一個の女性としての謙虚に透徹したので

ある。峻厳な反省と鋭敏な内省という放射能が発現したからである。精神の機構変革はただ反省と内省によってのみ可能であった。ボックス・ヒルのミス・ベイツにたいする侮辱で、エマはナイトリからしたたかに打ちのめされたのである。まずそのことによって、エマは真実の人間の地盤に足をつけたのである。そして人間のつつましさに徹したエマにしてはじめて、ナイトリへの愛情をすなおに認識することができた。エマはナイトリによって救われたといえる。

さて、ナイトリは慈悲心があつて、思慮分別がそなわつていたけれども、あるいは、そうしたものがあつたがゆえにこそかえて、あれほどの愛情をいだきながら、その愛情を表示する勇気を欠いだ「ひどく冷淡な愛人」であつた。エマの二十一歳にたいして、かれが三十七歳という年齢のひらきで躊躇したふしがあるかもしれないが、恋愛的な雰囲気を身辺にまとしてエマに接している風格ではなかつた。見るからに若々しい容姿であつて、ジェーンの美貌を嘆賞し、ハリエットには愛情を芽ばえさせ、そしてライヴァル意識も手つだつて、フランクを嫌悪した事情もあつたけれども、エマ自身にむかつて、恋心を直接じかにのぞかせる気配はみじんもなかつた。エマには忠言をしたり、説教をしたり、抗議したりすることはたびたびであつたが、それは年長の友人としてか、あるいは姻戚としての立場でしているにすぎないと思われた。かれの妻としては「隠しだてのない女」をもとめながら、みずからのいちばん大切な気心はつつみ隠していたわけである。遠くから釣糸を垂れて魚が餌さにつくの待つ姿勢であつた。要するに、静かなる情熱の恋愛であつた。ところでエマもまた、静かなる情熱しかもちあわせない気質であつた。ともに才知に長けた理知型の二人であつた。つまりは似合いの夫婦ということになるであろう。それにナイトリは、エマの姉イザベラの夫ジョン・ナイトリの実弟であるから、もともとかれとエマは義理の兄妹としての親交があつて、いわば「友愛」によって結ばれるべき因縁になつていた。ステイヴン

スンは『若い男女のために』(*Virginibus Puerisque*)のなかで、「友愛」(*comradship*)に根ざす結婚がもつとも安定していることを強調した。ハーディの出世作『狂える群を遠く離れて』(*Far From the Madding Crowd*)では、女主人公のエヴァディーン・バスシーバは、波瀾万丈の恋愛経験ののち、かの女の執事ゲイブリエル・オークとの長年の「友愛」(*camaraderie* とわざわざフランステルで書いています)にもとづいて、危なげのない結婚に落ちつくのである。エマとナイトリもまた「友愛」に根ざした「静かなる情熱」をとおして、安定した結婚にゴール・インしたと言える。作者オースティンにもかつて意中の人があったが、けっきょくは静かなる情熱のまま、結婚にふみきることをしなかった。オースティンはそのつぐないを、作中人物のエマ・ウッドハウスに果たさせたとも考えられる。シェイクスピアの『アントニオとクレオパトラ』のなかで、アグリッパは断言した、「神々は、われわれを人間にするために、われわれにいくつかの欠点を与えることにしている」と。ナイトリは「いろいろな欠点ぐるみ」にエマを愛したのであり、エマはかれにとって、「いろいろな欠点はあるながらも欠点のない」女性であった。オースティンはアグリッパの人間観を悟得していたとみられる。ところで、ハリエットとロバート・マーティンの結婚も安定した感じである。屈託のない従順なハリエットの人の好きさと、実直なロバートの誠意に信頼がおけるからである。しかもエマとハリエットとは、従前どおりにはいかないとしても、交際をつづけられる間柄になったのである。すべてがめでたしと舞いおさめられることになった。

※

『エマ』にかぎらず、オースティンの小説については賛否両論がある。オースティン礼讃はR・W・チャップマンと、シーラ・ケイ・スミスおよびG・B・スターンによって代表される。アンティ・オースティン派の代表はシャーロット・ブロンティとH・W・ギャロッドであり、アーノルド・ケットルも不満の意を表明している。と

もかくオースティンの人物描写は、E・M・フォースターによって折紙つきである。かれは著書『小説の諸相』(Aspects of the Novel)において作中人物を「平たい人物」(Flat character)と「まるい人物」(Round character)に区分して、前者は二次元にとどまる類型をしめすだけであるが、後者は三次元に浮きぼりされ、個性的に生きている人物であることを強調した、そして後者の例証としてミス・ベイツや、ミスタ・ウッドハウスらを取りあげている。したがって『エマ』のように、中心人物の性格展開を根幹とする小説では、小説の芸術性という立場から難癖をつけられる点はほとんどないと思われる。

問題は、ケットルが『英国小説概論』(An Introduction to the English Novel)で言明したように、『エマ』の舞台であるハイベリにたいする作者の社会的意識である。ハイベリという社会を、「歴史的なコンテクスト」によって正しく位置づけたかどうかという問題である。ハイベリのブルジョア的な社会機構を、オースティンは「盲目的に認容している」とケットルは見たのである。『エマ』では、『自負と偏見』その他の作品と同じように、貧富とか、格式とか、素性とか、要するにブルジョア的な階級意識によって全篇が支配されていた。そうした階級意識によって、上にへつらい下におぐる生活態度を批判して snobbery というが、まさにその「スノッパリ」の根性がハイベリの社会に深く根をはりめぐらしていた。作中のすべての人物が、多かれ少なかれ「スノッパリ」の根性で判断し、行動をしているのである。エマ自身がそうであり、ナイトリもそうであった。ケットルは実はこの弱点をついたわけである。しかしながら、階級的な格付けにこだわるエマの周辺には、そのたびに作者の諷刺の冷笑がからみついていた。そのことは、『自負と偏見』の結末において、ダーシーがエリザベスに愛恋の切なさを訴えながらも、かの女の社会的地位がかれのそれよりあまりに低いことを露骨に表明して、そのための苦衷をも披瀝している場面と同様であった。人間と人間との接触によってのみ成立する恋愛に、なにゆえに

階級意識が混入しなければならなかったのか、そうした現実の事実をとらえて、作者の炯眼が光っていたのである。むしろオースティンが、「歴史的なコンテクスト」によってそれを眺めていたわけではない。オースティンには、人間性の底面から反射する直観的な批判があったのである。

ハリエットをエルトンにとりもっていたころ、エマはハリエットと細民街へ慰問に行つて、そして貧民の生活ぶりについて感想を述べるくだりがあるが、それもけっきょくはブルジョア意識の慈善行為にすぎなかった。エマが独身でとおす意向をハリエットに話しているとき、「財産もいらない、職業もいらない、社会的な地位だつていらない」と力むところがあるが、それもハートフィールド邸に安住して言っているだけのことであった。ところで、コール家でのパーティの晩餐のときの会話については、つぎのような描写がある。

……言っていることでは、気のきいたことが少し、バカげきつたことが少しであつたが、大半はそのどちらでもなくて——
日常の所感とか、退屈なくりかえしとか、時効にかかつたニュースとか、おもしろくもない冗談とか、まあ、さういふ程度
のつまらなさであつた。(傍点は筆者)

これは明らかに、ハイベリの上層の集りにたいする批判であつた。ありのままに記述した言葉のなかに、教養または文化の規準をさしつけた作者の諷刺めいたものがひそんでいた。オースティンは、ハイベリの社会を「盲目的に認容している」のではなかった。このことはさらに、ジェーンの上品さについて、「その上品さは、容姿についてであろうと、精神についてであろうと、ハイベリにおいては、エマがお目にかかることはほとんどないものだった。そこでは、卑俗でないというだけで、非凡ともなり、長所ともなるのであつた」と叙述していることで確証されるであろう。ハイベリは、その住民であるエマの目をおして批判されたが、エマの目の背後に

は、同じくハイベリ人士であるナイトリの目があったのであり、そしてさらに、その二つの目の背後には、作者オースティンの「ハシバミ色」の眼が光っていたのである。この三つの目が、それぞれ離ればなれの視線を放っているか、あるいは同じ視線上にどれか二つが重なっているか、あるいは三つとも同時に同一視線にならんでいるか、この三者三様の配列によって、小説『エマ』の機構をしめくくる諷刺や、ヒューマーや、あわれみが醸しだされているのである。もちろん他の作中人物らのそれぞれの目についても、同様な配慮がなされていることに留意しなければならない。そうすると、オースティンの人物描写の技巧には、ヘンリ・ジェイムズのそれに似たものが発見されるであろう。たとえば、ジェーン・フェアファックスの描写の大半は、かの女が他の作中人物にあたえた印象や反応に依存している。F・R・リーヴィスが、『偉大な伝統』(The Great Tradition)において、偉大な英国小説作家として、ジェーン・オースティンと、ジョージ・エリオットと、ヘンリ・ジェイムズと、ジョージ・コンラッドの四人だけを選定したことについては異論があるにしても、オースティンが、イギリス小説の過去の伝統をともに継承しながら、独創的な独自の境地を開拓して、そしてそれを、後世へつなげるべき伝統のなかに織りこんだことを主張した所論は、卓説であると思われる。